

## 池内宏の満鮮史研究

### ―『後藤新平文書』・アジア歴史資料センター所蔵文書の分析を中心に―

井上直樹

#### はじめに

戦後日本の東洋史学研究が、帝国日本の朝鮮・満洲・中国などへの勢力拡大と軌を一にするような形で行われてきたことは贅言を要すまい。それだけに戦後の日本で、それら研究の問題点を明らかにし、その研究のあり方を批判的に検証する作業は必要不可欠であった。そうした観点から、先学によってこれまでも戦前日本の東洋史学への批判的検証が行われてきたといえる（旗田「一九六六」、五井「一九七六」など）。こうした作業は斯界の向後のあり方を考究する上でも、今後も引き続き行っていく必要がある。

ところで、こうした作業を行う前提として、まずは戦前日本の研究者たちが、当該期、どのような認識の下、どのような研究を行ってきたのかを明らかにする必要がある。そのような観点からこれまでも東洋史学者たちの史料調査・遺跡踏査の一端などが解明されてきた（旗田「一九六六」、中見「一九九二・二〇〇六」、酒寄「二〇〇一・二〇〇七」、塚瀬「二〇一一」など）。筆者もこうした先人の優れた研究の驥尾に付して、これまで戦前・戦後の日本の朝鮮史学・満鮮史学<sup>①</sup>の実態について考究してきた（井上「二〇一〇・二〇一二」）。また、

これまでほとんど論及されてこなかった国立公文書アジア歴史資料センター（以下、アジア歴史資料センター）に残されている文書などを手がかりとして東京帝国大学の白鳥庫吉や京都帝国大学の羽田亨らの満洲踏査とその研究の一部を明らかにしてきた（井上「二〇一七・二〇一八」）が、その過程で、『満鮮史研究』（上世編二冊・中世編三冊、吉川弘文館、一九六〇年）を刊行するなど、積極的に満鮮史を考究してきた東京帝国大教授であった池内宏の満鮮史研究に関する関係文書なども確認することができた。

近年、アジア歴史資料センターの文書を利用した史学史研究もあるが（岡村「二〇〇六」、古松「二〇〇五」、酒寄「二〇〇七」、管見によれば、それ以外に、いまだこれらアジア歴史資料センターの関係文書など当該期の文書を積極的に利用した研究はみられず、これら文書は東洋史学史研究において必ずしも積極的に活用されてきたとはいえない状況である。また、上述のように戦前日本の東洋史学、そのなかでも満洲史・朝鮮史・満洲史上の諸問題を積極的に論究し、斯界をリードしてきた池内の研究業績・動向などについては、三上「一九七〇」、窪「一九九四」、青山・旗田他「二〇〇一」、荊木「二〇一四」が論及

するものの、既述のアジア歴史資料センター所蔵関連文書は用いられていない。さらに、これ以外に『後藤新平文書』にも当該期の池内の研究動向の一端を伝える文書があるが、こちらも参照されていない。これら文書は同時代資料として、当該期の池内の研究活動の一端を伝える史料として看過できず、池内はもちろん、戦前日本の東洋史学のあり方を理解する上でも軽視できない。

そこで、ここではこれまでほとんど論及されてこなかった『後藤新平文書』やアジア歴史資料センター所蔵の池内関係文書など、当該期の関連文書などの分析を通して、池内の満鮮史研究の具体的実状を明らかにし、戦前日本の東洋史研究の批判的考察の端緒にしたいとおもう。

## 一 池内宏の「満鮮史」研究と満鉄

### ― 『後藤新平文書』文書の検討を中心に ―

#### (一) 池内宏と満鉄歴史調査部

明治三七（一九〇四）年九月に東京帝国大学文科大学史学科を卒業した池内宏は、独協中学・早稲田中学教員を経て、明治四一（一九〇八）年、白鳥庫吉が南満洲鉄道会社総裁であった後藤新平に建議した結果、同年一月、満鉄東京支社仮事務所（旧川村純義宅の一部）に設立された、白鳥を主任とする満鉄歴史調査部の研究員となった<sup>2)</sup>。これ以後、池内は積極的に満鮮史研究を進めていくことになるが、池内は東京帝大時代にすでに池内「一九〇四・〇四」を発表しており、それ以後も池内「一九〇七・〇八・〇八・〇九」というように精力的に論考を公表している。これらの論考のなかには池内「一九〇九」

のように、池内の満鉄歴史調査部加入後に執筆されたと考えられるものもあった。しかも、それらのなかには池内「一九〇八・〇九」のようにインド史に関するものまであり、池内は満鉄の歴史調査作業を進めながら、それとは直接関係しないインド史の論考も発表し続けていたのであった<sup>3)</sup>。白鳥は東京帝大在学時以来のこうした池内の精力的な研究活動を認め、池内を歴史調査部に起用したのである。

ところで、池内の満鉄歴史調査部の加入であるが、白鳥「一九七二」には歴史調査部発足当初の部員が箭内互・松井等・稲葉岩吉の三名で、「これだけでは人が足りないので、津田左右吉、池内宏の両君が部員に加は」ったと述べているから<sup>4)</sup>、池内は明治四一（一九〇八）年一月の歴史調査部発足時にはまだ部員となっていなかったのであった。ただし、池内とともに同歴史調査部に加わることになった津田左右吉の明治四一（一九〇八）年八月一日の日記には、「暑さを冒して満鉄にゆく……会社にはけふは誰もをらず、独り「金石索」など繕き見て、二時間あまりをすごし、其のまゝに帰れり。帰路、池内を訪ひ、玄関に立ち話して用事をすまし、急ぎ帰りぬ」とあるから（津田「一九六五」）、少なくとも八月までに池内・津田は、歴史調査部に加入していたのであろう。

池内・津田が明治四一（一九〇八）年八月以前のいつから歴史調査部の研究に従事するようになったのか、具体的な月日は必ずしも詳らかではないものの、池内を含めた同年の調査情況が、『後藤新平文書』にも伝えられている。これについては井上「二〇一三」で一部論及したこともあるが、池内のそれを具体的に検討したわけではない。また、

管見によれば、これを積極的に活用した研究も認められない。そこで、ここでは改めて同文書からうかがえる池内の研究状況を考究してみよう。

明治四一（一九〇八）年の白鳥ら満鉄調査部の研究動向を伝えるのが、白鳥から後藤へ提出された「明治四十一年満洲歴史調査報告書」（『後藤新平文書』三三八―三四二）である（図一）。これによれば、同年の白鳥らの調査の主眼は、「満洲ニ於ケル歴史地理ノ考査」であった。それは「地理ノ検覈ハ完全ナル歴史的研究ノ基礎」であり、「本調査ノ目的タル満洲歴史ノ大成ヲ期センニハ先ヅ之ヨリ着手スルヲ妥当ノ順序ナリト認メタルガ故」であったからであった。

しかし、上代に関しては「一定ノ学説アルモノハ明確動カスベカラズ」で、定説に至っていないものについては、「其ノ解決甚ダ困難ニシテ之ヲ近代ニ関スル研究ノ結果ト、实地ノ踏査トニ待タザルベカラザル」であったから、「且ラク之ヲ他日ニ譲」ることとし、松井が遠代、箭内が元代及び明初、稲葉が明末及び清の歴史地理研究を担当し、新加入

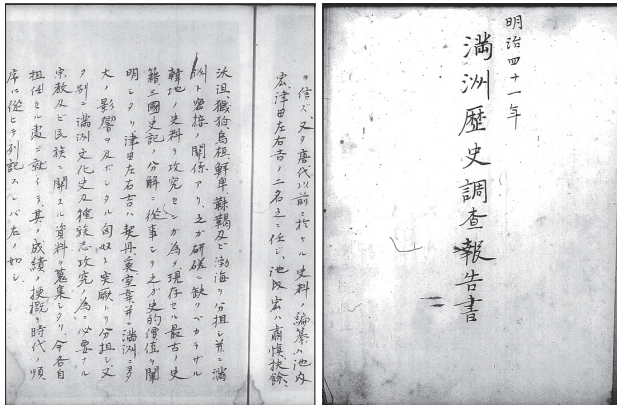


図1 「滿洲歴史調査報告書」表紙（右）と池内担当部分（左）

の池内と津田が既述のように難問とされた古代史関連史料の蒐集担当となったのであった。このうち池内は肅慎・扶余・沃沮・穢貊・烏桓・鮮卑・靺鞨・渤海史料の蒐集および『三国史記』の討究を行い、その史料の価値を解明することとなり、津田は契丹・奚・室韋・匈奴・突厥史料及び満洲文化史・種族関係の宗教・民族関係史料を蒐集することになった。

ところが、この歴史地理調査の前提となる史料蒐集に白鳥たちはかなり手こずったようである。というのも同文書のなかで白鳥は、研究開始年であったということもあって、「調査ノ進行ヨリモ之〔史料蒐集・井上〕ニ要スル諸般ノ準備ニ尠ナカラザル時間ト労力トヲ費シタリ」と述べ、関連書籍の購入・借り入れ・謄写などの作業に従事しなければならず、本来、歴史地理調査に従事すべき稲葉が、金沢にまで出張し、前田家文庫の蔵書調査、借入・謄写に関する交渉を行ったことを開陳している。稲葉の金沢調査はわざわざ彼自身によって「金沢訪問劄記」としてまとめられて提出されたほどであった。この稲葉の「金沢訪問劄記」は残念ながら、当該文書には附属しておらず見当たらないため、その詳細は不明であるが<sup>5)</sup>、別途、経過報告書が作成され提出されていることからみて、貴重な研究成果として考えられたのである。このように史料蒐集に忙殺されるなかで、関連史料の蒐集・整理及び検討などを担当する研究員として、池内と津田が抜擢されたのであろう。

こうした史料蒐集だけでも大変な作業であったが、同文書によれば全部員はこれ以外にも着手していた課題があり、次年度以後、継続し

て研究することが伝えられている。具体的には、池内が漢代の遼東及び朝鮮四郡に関する研究、松井が『金史』地理志北京路にみえる州県の位置比定、箭内が遼河流域の都邑志の編纂、稲葉が建州衛の位置比定であった。さらに同文書によれば、二年目には上述の課題遂行とともに稲葉・松井・箭内三名が継続して歴史地理の研究に従事しつつ、朝鮮・満洲の境界にあたる鴨緑江・豆満江地域に現地調査に赴くとともに<sup>6)</sup>、一年目にすでに論究した遼河流域に関する研究成果の編纂作業も行うこととなっていたのであった。また、池内・津田に関しても二年目に、池内が漢代の遼東及び朝鮮半島北部の史的研究、津田がウイグルをはじめ唐以前の満洲地方と関係のある北方民族史料の編纂を完了させることになっていたのであった。満洲史研究は「学者の閑事業にあらざして、国家経営の任に当る為政者の任なり。国民の務なり」と主張して「満洲歴史編纂の急務」『後藤新平文書』㊦三八―三四、一(図二)、満洲史研究援助を後藤に認めさせてしまった以上、白鳥としても研究意欲旺盛であることを示し、必要な課題を列挙し、それに向かつて邁進していることを後藤にアピールしておきたかったのであらうし、その必要があったのである。それが研究一年目の成果報告であればなおさらのことであつたであらう。こうして池内をはじめ、白鳥以下の研究部員は満洲史研究に没頭していくのであった。

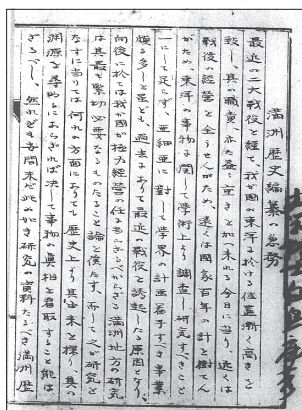


図2「満洲歴史編纂の急務」

このように池内は白鳥を主任とする満鉄の歴史調査部で研究を進めていくことになったが、白鳥「一九一四」が「同氏(池内・著者)は李朝時代の朝鮮を担任せる」と言及し、かつ池内自身も歴史調査部加入後ほどなく、文禄慶長の役に関する論考(池内「一九一〇」p. 一〇〇)を発表していることからみて、どうやら池内の研究担当は既述の研究一年目の朝鮮古代史から朝鮮時代の研究へと変化したようである。そのなかでも池内は特に文禄慶長の役を主たる研究テーマとしたのであった。それは、白鳥「一九一四」によれば、文禄慶長の役が満鮮史における「東亞史上の重要な事変」であるとともに、日本と朝鮮の関係のみならず、「大陸の風雲また之が為めに多少の動揺を生じ、其の後代に及ぼせる影響また尠少ならず」であったからであった。そのため、これは「啻に史学上の興味ある問題たるのみにあらず、又た東亜列国の国際関係と朝鮮人の国民性を知了するに於いて絶好の資料を供給するものといふべ」きで、これを考究することは、朝鮮の「新附の民に対する綏撫の政策、此の地に於ける實際的経営及び大陸に対する諸般の交渉、また皆な其の跡に鑑るところ無かるべからざる」であつたためであった。

白鳥は歴史調査部設立に際して、「満洲地方は実は東洋禍乱の源泉」であり、「四千余年の間、幾度か東方亜細亜の風雲を捲き起こしたるその原動力はみな此の地に存」しており、満洲研究は「亜細亜文明の開導者たる天職を有する我が邦家全般の為政に關してもまた必須の業」であることから、その研究の必要性を後藤に訴えていたのであつた(「満洲歴史編纂の急務」『後藤新平文書』㊦三八―三四―一)。そ

のため、「東方亜細亜の風雲を捲き起こし」、かつ史学史上の問題だけでなく、「実際の経営及び大陸に対する諸般の交渉」において極めて重要であった文祿慶長の役の研究は、白鳥にとっても後藤へ建議した満洲史研究の重要性を具体的に示すものであり、それだけに満洲史研究上、特に重要な研究課題として認識されたのであろう。そうであったからこそ、文祿慶長の役の研究は、満洲の歴史地理、朝鮮の歴史地理とならんで歴史調査部の重要な研究課題となり、後述するように、満洲・朝鮮の歴史地理研究に次いでその研究成果が刊行されることになったのであった。

そして、この研究課題を池内が担当するようになったのは、池内が東京帝大在学中に日明関係に関する論考（池内「一九〇四」）をすでに発表しており、文祿慶長の役研究担当者として適任であると主任である白鳥に判断されたからであろう<sup>70</sup>。

こうして池内は文祿慶長の役の研究に着手するようになったのであった。その頃、日本は朝鮮を併合したが、白鳥「一九一四」によれば、これを契機にしてそれまで知られていなかった新たな朝鮮史料が入手できるようになり、それによって朝鮮・日本史料の相互比較検討が可能となり、「此の戦役の研究始めて其の緒に就くことを得たるの感あり」という状況になっていたのであった。こうした白鳥の発言を裏付けるように、池内は朝鮮併合から数年以内に池内「一九一・一二・一三 a・一二二 b・一二三 c・一四 a・一四 b・一四 c」と立て続けに文祿慶長の役に関する論考を発表していったのであった。

その後、これら研究成果は、南満洲鉄道株式会社歴史調査報告第三

として『文祿慶長の役 正編第一』（丸善、一九一四年）として結集したのであった（図三）。歴史調査部では、その前年、『満洲歴史地理（上・下）』『朝鮮歴史地理（丸善、一九一三年）』を刊行しており、池内の研究はそれに続く第三弾であった。文祿慶長の役研究が、歴史調査部においてきわめて重視されていたことを看取できよう。

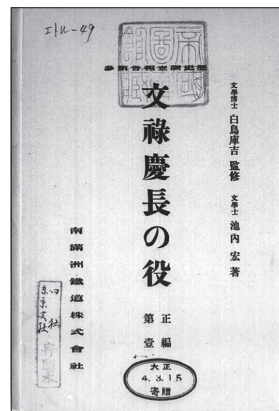


図3「文祿慶長の役正編第一」

## （二）池内宏の満鮮史研究と東京帝国大の満鮮地理歴史研究

ところが、「『文祿慶長の役』正編第一」の印刷半ば（池内宏「一九三六」）にして、突然、池内をはじめ白鳥らの研究は大問題に逢着することになってしまったのであった。というのも、白鳥を主任とする歴史調査部が「突然、廃止せられた」からである（池内「一九三六」）。歴史調査部の一連の研究は、日露戦争後の日本の満洲経営という現実的課題を前提とし、白鳥の満洲史・朝鮮史・満鮮史研究への熱意と、満鉄総裁であった後藤の科学的研究にもとづく満洲経営策とが合致した結果であり、あくまでも満鉄総裁であった後藤の個人的な支援に依存する部分が大きかった。そのため、後藤もしくは後藤の薫陶を受けた経営者が満鉄から去り、「後藤系でない全然別の人」であった野村龍太郎が満鉄総裁になると、歴史調査部に対する理解はほとんどなくなっていく、副総裁の伊藤大八は「利益を目的とする会社に、

斯様な研究所の必要はないから廃止せよ」とまで主張し、大正四（一九一五）年一月、満鉄東京支社に設置されていた歴史調査部は廃止されることになったのであった（白鳥「二九七一頁」）。

ところが、白鳥からすれば、「仕事はまだこれから」で、これまでの研究は「歴史地理で土台を建てた」ところで、「これから本当の仕事を始めようとする時」であり、ここで廃止してしまうと今までやってきたことが「無駄になつて」しまうため、白鳥は研究継続を改めて満鉄に訴えたのであった。しかし、満鉄は事業継続が困難であると、その要求を拒否したのであった。そこで、白鳥は東京帝大で引き続き研究を続けることにし、その財政的支援を満鉄に要請したのであった。それをふまえて満鉄も年三〇〇〇〇円を支給することを提案し、白鳥も「廃するよりはよからう」ということで、提案を受け入れることになったのであった（『白鳥庫吉博士談話』『後藤新平関係文書』三三八―三四一四、以下、「談話」（図四））。

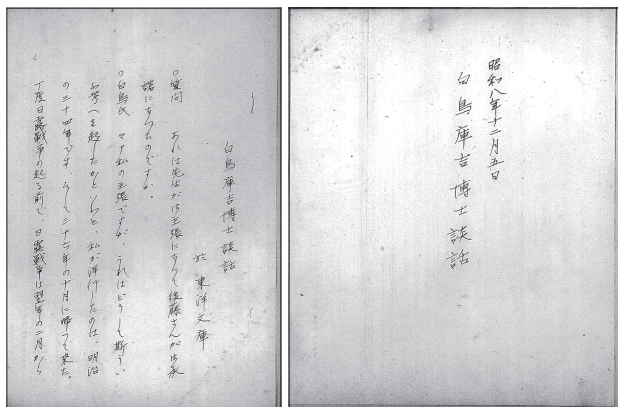


図4 談話表紙（右）とその冒頭部分（左）

で白鳥が満鉄からの支援を受けて購入した書籍も、白鳥らが「そつくり持つて来た」ため、東京帝大所蔵となったのであった（「談話」）。こうして満鉄の歴史調査部は廃止され、満洲史・朝鮮史・満鮮史研究事業は東京帝大へと委嘱されることになったが、それにともない、歴史調査部部長であった稲葉君山・松井等・瀬野馬熊の三人が調査部を去ることとなった。研究事業は東京帝大文学部で行うことになったものの、既往の人員の手当まで東京帝大で負担できたわけではなかったためである。さらに東京帝大教授であった箭内互も大正八（一九一九）年に死去したため、新たに和田清が同研究事業に加入することになり、研究事業は白鳥・池内・和田が中心となつて継続されたのであった。

なお、前述のように満鉄から東京帝大へは毎年の研究費として三〇〇〇〇円が支給されたが、白鳥によればその後、増額されて五〇〇〇円となり、時には七〇〇〇円や八〇〇〇円となったこともあるという（「談話」）。ただし、この満鉄の援助は有限で、原則的には五年ごとに新たに継続申請を行い、それが認めら

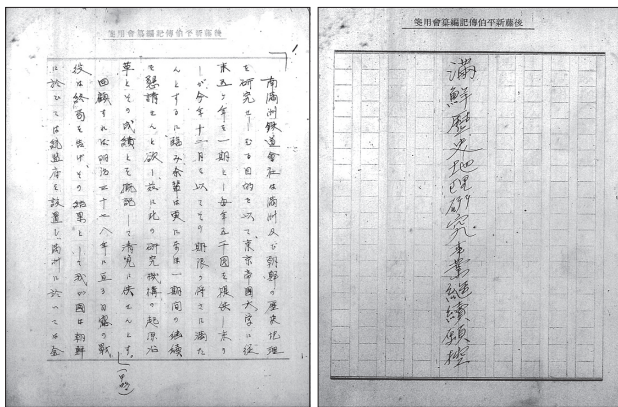


図5 「継続願」表紙（右）と冒頭部分（左）

れてはじめて研究がさらに五年延長されるといふ形式であったようである。というのも白鳥は「談話」のなかで、「毎年五千円、それが五年ですから、二千五百円づ、送つて来る訳です」（「談話」と述べ、五年をベースとして研究費が支給されていたと陳述しており、白鳥も昭和八（一九三三）年、満鉄に「満鮮歴史地理研究事業継続願」を提出しているからである（『満鮮歴史地理研究事業継続願控』『後藤新平関係文書』三三八―三四一四、以下、「継続願」（図五））。加えて、既述のように、予算が三〇〇〇円や七〇〇〇円、八〇〇〇円と変化しているのも、白鳥が何度か申請したことを反映したものと理解してよからう。予算額の変化は、白鳥の研究申請をふまえ、それに応じていたと考えられる。このように白鳥は五年ごとに「継続願」を満鉄に提出し、満鉄もそれをふまえて支援額を決定していたのであった。

とところで、既述のように白鳥は昭和八（一九三三）年に研究継続を申請しており、かりに研究事業が東京帝大に移管された大正四（一九一五）年から五年ごとに更新していたとすると、昭和八（一九三三）年は研究終了年・申請年とはならない。では、白鳥らの研究事業はいつからどのような形で申請されたのであろうか。このことを論究する上で、改めて注目されるのは、歴史調査部が研究七年目にして廃止されてしまったことである。つまり、白鳥らの研究は二期目の二年目で終了したことになるのである。恐らく、東京帝大での研究事業は当初、それに続く三年目としてスタートしたのであろう。そのように理解すれば、その次の三期目の研究は大正七（一九一八）年から五年となり、昭和八年は歴史調査部以来の六期目の研究事業に相

当することになる。こう

した研究事業をまとめたのが表一である。史料がほとんどなく、推測によるらざるを得ない部分もあるが、昭和八（一九三三）年を研究継続申請年とすると、このように解釈して始めて整合的に理解できるのであり、今はこのように考えておきたい。

こうして白鳥は五年ごとに申請を行い、研究事業を継続していたが、これら申請の具体的な内容は必ずしも詳らかではない。しかし、幸いなことに既述の「継続願」には昭和八（一九三三）年時の継続理由が示されている。そこで、それにもとづいて白鳥の研究継続の理由を確認し、東京帝大における満鮮歴史地理研究事業の一端を明らかにしてみたい。

「継続願」の大部分は白鳥による当該研究開始の動機、既往の研究事業の経緯となっており、最後に継続の理由が記されている。それによれば、白鳥たちはすでに満鉄の支援を受けて一三冊の報告書を提出したが、これら研究成果は満洲国の建国を契機とする満洲史への関心の高まりとともに、「需要は一時に増加し、今日に於いては仮令数

表1 歴史調査部・東京帝大満鮮歴史研究事業

【歴史調査部】				【②期】			
【①期】				【③期】			
西暦	元号	年	研究年度	西暦	元号	年	研究年度
1908	明治	41	1年目	1913	大正	2	1年目
1909		42	2年目	1914		3	2年目
1910		43	3年目				
1911		44	4年目				
1912		45	5年目				

【東京帝国大】				【③期】				【④期】			
【②期】				【2期】				【3期】			
西暦	元号	年	研究年度	西暦	元号	年	研究年度	西暦	元号	年	研究年度
1915	大正	4	3年目	1918	大正	7	1年目	1923	大正	12	1年目
1916		5	4年目	1919		8	2年目	1924		13	2年目
1917		6	5年目	1920		9	3年目	1925		14	3年目
				1921		10	4年目	1926		15	4年目
				1922		11	5年目	1927	昭和	2	5年目

【⑤期】				【⑥期】				【⑦期】			
【4期】				【5期】				【6期】			
西暦	元号	年	研究年度	西暦	元号	年	研究年度	西暦	元号	年	研究年度
1928	昭和	3	1年目	1933	昭和	8	1年目	1938	昭和	13	1年目
1929		4	2年目	1934		9	2年目	1939		14	2年目
1930		5	3年目	1935		10	3年目	1940		15	3年目
1931		6	4年目	1936		11	4年目	1941		16	4年目
1932		7	5年目	1937		12	5年目	1942		17	5年目

※③期は5ヶ年計画の研究事業を、④期は東京帝国大での研究事業を示す

百万を投ずると雖も其の全部を購入するは困難となれり」という情況であった。このように白鳥はこれまでの研究が非常に高い評価を受けていることを強調し、その研究の重要性と社会的意義を訴えた上で、これまでに「満鮮史の全域の中上代より明の中葉に至る至難の問題は既に研究を経た」ため、「今後研鑽を要する時代は明朝の末葉と清朝の一代とのみとなれり」という情況であることを説き、満鉄にさらなる研究支援を要請したのであった。

こうした白鳥の主張はそのまま満鉄に認められたようであり、表一に示したように昭和八（一九三三）年から昭和一二（一九三七）年までの五年間、歴史調査部結成からみて六期目、東京帝大へ依頼されてから五期目の研究が始まったのであった。こうした東京帝大での研究の成果が表二である。この研究事業によって一九一五年から一九四一年までに全一六冊の研究報告書が刊行され、それらは「我が邦東洋学会が世界に誇るべき一大業績」（和田清「一九三二」と称賛されたのであった）。

このように東京帝大では白鳥を中心に、満鉄の支援を受けて「満鮮地理歴史研究」が行われたのであったが、満鉄の歴史調査事業の廃止および東京帝大での調査は、池内の研究にも大きな影響を与えたのであった。表二からも看取されるように、池内の研究は「鮮初の東北境と女真との関係（一）」・「鉄利考」（『満鮮地理歴史研究報告』（以下、『報告』）二・三、一九一六年）、「鮮初の東北境と女真との関係（二）」・「高麗成宗朝に於ける女真及び契丹との関係」（『報告』四・五、一九一八年）、「高麗太祖の

経略」・「高麗顯宗朝に於ける契丹の侵入」・「鮮初の東北境と女真との関係（四）」（『報告』七、一九一八年）、「朝鮮高麗朝に於ける女真の海寇」（『報告』八、一九二一年）、「完顔氏の曷懶旬

経略と尹瓘の九城の役」（『報告』九、一九二二年）、「金末の満洲、蒙古の高麗征伐」（『報告』一〇、一九二四年）、「金史世紀の研究」（『報告』一一、一九二六年）、「曹魏の東方経略、高句麗滅亡後の遺民の叛乱及び唐と新羅との関係」（『報告』一二、一九二六年）、「肅慎考、夫余考」（『報告』一三、一九三二年）、「百濟滅亡後の動乱及び唐・羅・日三国の関係」（『報告』一四、一九三四年）、「勿吉考」（『報告』一五、一九三七年）、「楽浪郡考」・「高句麗討滅の役に於ける唐軍の行動」（『報告』一六、一九四一年）のように、文祿慶長の役に關する研究で

表2 「満鮮地理歴史研究報告」 収載論文一覧

巻年	著者	収載論文	巻年	著者	収載論文
1 1915	津田左右吉 松井 等	勿吉考、室韋考、安東都護府考、渤海考 契丹勃興史、契丹可敦城考	8 1921	津田左右吉 松井 等	百濟に関する日本書紀の記載 契丹人の信仰
2 1916	津田左右吉 箭内 互	遼代高古嚴烈考、遼康古考 金の兵制に関する研究	9 1922	池内 宏 箭内 互	朝鮮高麗朝に於ける女真の海寇 元代の官制と兵制
3 1916	池内 宏 津田左右吉 松井 等 箭内 互	鮮初の東北境と女真との関係 (1) 鉄利考 遼の遼東経略 五代の世に於ける契丹上、遼代紀年考 元代社会の三階級	10 1924	津田左右吉 池内 宏	三国志記高句麗紀の批判 契丹人の衣食住 完顔氏の曷懶旬経略と尹瓘の九城の役 元朝牌符考
4 1918	松井 等 津田左右吉 箭内 互 池内 宏	契丹の国号編制及び職制、宋対契丹の戦略地理 金代北遼考 蒙古の高麗経略	11 1926	池内 宏	金末の満洲、蒙古の高麗征伐 神權思想に関する二三の考察
5 1918	池内 宏 箭内 互 松井 等 津田左右吉 池内 宏	鮮初の東北境と女真との関係 (2) 高麗成宗朝に於ける女真及び契丹との関係 魏朝考 北宋の対契丹防備と茶の利用 遼の制度の二重体系 鮮初の東北境と女真との関係 (3)	12 1930	和田 清 池内 宏	漢代政治思想の一面 金史世紀の研究 (1) 元貞略三衛に関する研究 (1) 曹魏の東方経略、高句麗滅亡後の遺民の叛乱及び唐と新羅との関係 前漢の儒教と陰陽説
6 1920	津田左右吉 箭内 互 池内 宏	上代支那人の宗教思想 元代の東蒙古	13 1932	津田左右吉 池内 宏 津田左右吉 和田 清	肅慎考、夫余考 儒教の実践道徳 明初の蒙古経略、元貞略三衛に関する研究 (2)
7 1920	池内 宏 箭内 互 池内 宏 池内 宏	高麗太祖の経略 契丹に対する北宋の配兵要領 高麗顯宗朝に於ける契丹の侵入 鮮初の東北境と女真との関係 (4)	14 1934	池内 宏 和田 清	百濟滅亡後の動乱及び唐・羅・日三国の関係 明初の満洲経略上
			15 1937	池内 宏 和田 清 津田左右吉	勿吉考 明初の満洲経略下 「周官」の研究
			16 1941	池内 宏 池内 宏	楽浪郡考 高句麗討滅の役に於ける唐軍の行動

\*ゴチ：池内宏論文



はなく、主に高麗・遼・金の対外関係など、満鮮史に関するものであった。

この間、池内は文祿慶長における加藤清正の活動に関する池内「二九二五」を発表しているが、それは歴史調査事業廃止前の成果と考えられ、それ以後の研究は、上述したように、おおよそ高麗、遼、金の対外関係などを中心とした満鮮史関連のものであった。これは池内自身が歴史調査部から東京帝国大学文学部に関係史料が移管されたものの、それら史料は「数年の間整理未了の為閲覧に便ならざるものありき」で、「纔に曙光を認めし前記の研究〔文祿慶長の役のこと…井上〕を続行するを得ず、開拓の分野を他に求めて力を其の方面に傾くるに至れり」であったからであった（池内「一九三六」）。池内はこのようにこの時期以後、精力的に満鮮史関係の研究を進め、後にその研究成果は『満鮮史研究』上世編二冊・中世篇三冊（吉川弘文館、一九七九年）としてまとめられ、彼は満鮮史研究の第一人者とされることになるが、奇しくも歴史調査部の廃止による文祿慶長の役研究の頓挫が、彼をしてより高麗・遼・金史など満鮮史研究に注力させていくことになったのであった。

だが、それは満鉄の支援を受けて満鮮史研究を担わざるをえなかった、当時、東京帝国大助教となっていた池内の戦略的転換でもあった。その結果、満鉄の支援を受けた池内は既述のように表二の論文以外にも『史学雑誌』などの学術雑誌に次々に満鮮史関係の論考を発表していったのであった。そして、それら研究が既述のように彼の研究を代表する『満鮮史研究』（前掲書）として結実することになるのであ

た。その限りにおいて満鮮史家としての池内のさらなる飛躍、研究領域の拡大は、必ずしも彼の知的要求にもとづくものではなく、満鉄の支援を受けて研究を続けていかねばならなかった東京帝国大教員という、彼をとりまく環境に大きく影響を受けてのものであり、受動的なものですらあったといえる。史料閲覧の制約など厳しい研究環境のもとで、たくましく研究を継続していった池内の研究の一端をここからうかがい知れるであろう。ここに当該期における池内の研究の特質が認められる。

それでも池内は、大正七（一九一八）年以来、古蹟調査のために朝鮮に赴くたびに、余暇を利用して文祿慶長の役に関する新たな史料を蒐集し、これまで同研究が「自ら意に満たざるもの甚だ多かりし」であったために、「大正の末年、全く稿を改め」、さらにそれを昭和九（一九三四）年に再度修正し、『文祿慶長の役別篇第一』を刊行したのであった（池内「一九三六」）。池内は研究環境の変化にともなう研究主題の変更に迫られながらも、当初の研究課題であった文祿慶長の役の研究を一人細々と続けていたのであった。そして、その研究成果を改めて刊行したのであった。

このように、池内は当初の研究課題である文祿慶長の役研究を、高麗・遼・金史など満鮮史研究とともに進めていたが、その一方で、池内はそれとは別に、満洲事変・満洲国建国を契機として外務省文化事業部の支援を受けて、満洲史研究を進展させていくことになる。それら研究の一端については井上「二〇一八」で論究したが、それら以外にも池内によって進められていた研究に関する文書が、アジア歴史

資料センターに残されている。そこで、以下、アジア歴史資料センター所蔵文書から、満洲事変・満洲国建国を契機として進められた池内の研究の一部を明らかにしてみた。

## 二 満洲国と池内宏の満洲史研究

### (一) 熱河山莊康熙帝題詠複製事業と『清朝実録』刊行事業

昭和七（一九三二）年の満洲国の建国を契機として、日本では満洲史への関心が高まり、昭和八（一九三三）年一〇月、白鳥など日本の研究者と満洲国の研究者からなる日満文化協会が設立された（アジア歴史資料センター「日満文化協会成立の件」レファレンスコード C04011714900・「対満文化事業」レファレンスコード B13081271200）。こうして日本・満洲国の研究者によって積極的に満洲史研究が行われることになったのであった。

一方、日本の外務省文化事業部では「対満文化事業計画」を立案し、満蒙人文科学研究として東方文化学院東京研究所・京都研究所に研究費として四万円を充当させることになった（「対満文化事業日満当事者懇談会ニ関スル件 昭和七年一月」レファレンスコード B05015212100）。

なお、これに先だって、外務省文化事業部は東方文化学院東京研究所長の服部宇之吉に、満蒙文化研究についての人選・研究内容の素案を依頼しており、これをふまえて契丹・女真など満洲史に関する研究事業が採択されたのであった。池内宏もまたこうした研究事業の一環として「遼金時代ニ於ケル契丹民族ノ歴史的研究」・「李朝実録抄録」

を進めていた。これら研究事情についてはすでに井上「二〇一八」で論及したが、池内は当該期、これとは別の研究も進めていたのであった。それを具体的に伝えるのが、アジア歴史資料センター所蔵の「避暑山莊題詠複製事業助成（池内宏）昭和十年三月」（レファレンスコード B05015382100）である（図六）。これについてはこれまでまったく論及されていないが、これも当該期の池内の研究を考究する上で無視できない。そこで、以下、池内のこの研究について論究していくことにしよう。

同文書によれば、熱河離宮内に康熙帝が臣下に描かせた「三十六景」に「御製ノ詩ヲ題シテ出版」したものは「熱河最古ノ文献」であるものの、その刊行数が僅少のため、「殆ント世ニ伝フルモノナキ」という状態であった。しかし、幸いなことに羅振玉がその一部を所蔵していた。そこで、池内はこれを借り受け複製するために、昭和一〇（一九三五）年三月から翌昭和一一（一九三六）年四月までの一年間の事業助成を申請したのであった。

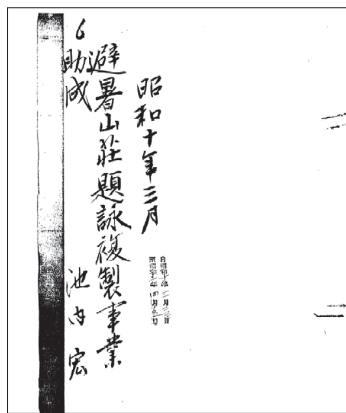


図6

池内がこの事業を申請した第一の理由は、複製した御製を来日する「康德皇帝陛下」（満洲国皇帝溥儀・井上）に献上するためであった。第二の理由は、それを日本・満洲・中国の三国の学界に頒布するためであった。これは池内の所属していた日満文化協会の「東方古文化ヲ

保存発揚セントスル趣旨ヲ天下ニ明ラカニスル」ためでもあった。池内は熱河の康熙帝の御製の複製・頒布によって、日満文化協会の活動の意義を日本だけでなく満洲国さらには中国に示そうとしたのであった。

そのため、池内は複製品五〇〇部のうち三五〇部を、上記三カ国の主要大学の図書館・公私立図書館、満洲国政府要人、「漢文化ヲ専攻セル本会ノ評議員（日満文化協会会員・井上）」などに送付することを計画し、残部一五〇部は保存し、将来、熱河文化を論究する研究者に頒布し、「其効果ヲ発揮セントスル」予定であった。

こうした池内の熱河山莊所在康熙帝題詠の複製事業は、外務省文化事業部に認められて、編纂作業が行われ、複製品は昭和天皇・皇后・皇太后に加え、秩父宮・高松宮、満洲国皇帝の溥儀、さらには日本・満洲両国の関係者に分配され、「多大ノ感銘ヲ博シ得タ」のであった。だが、当初予定していた中華民国の各大学・図書館・要人への頒布は、「未ダ之ヲ配布スルノ好時期ニ達セザル」という状況であった。満洲国建国以後の日中の関係悪化をふまえれば、その実現は相当困難であったであろう。

このように池内の熱河山莊題詠複製事業は、中華民国の諸大学・図書館への配布は叶わなかったものの、「多大ノ感銘ヲ博シ得」、「東方古文化ノ保存発揚ニ資」すという所期の目的をある程度達成することができたのであった。

一方、前述のように、満洲国建国を契機に東京帝大では池内を指導員として三上次男が遼代女真族の研究を、旗田巍らが『朝鮮王朝実録』

の中の満蒙史関係記事の抄録を行っていたが（井上「二〇一八」）、池内の研究事業はそれだけではなかった。

アジア歴史資料センターの「清朝実録出版（池内宏）昭和九年九月」（レファレンスコード B05015881900）・「満日文化協会紀要」（レファレンスコード B05016057100）によると、満洲国政府が「大清歴朝実録復刻の事業」を日満文化協会に委嘱すると、日満文化協会ではただちに実録委員会が組織され、池内は羅振玉・榮厚・羽田亨とともにその委員となり、その作業を監督することになったのであった。試験的作業を経た後、昭和一〇（康徳二・一九三五）年一月から奉天に器材類を持ち込んでの影印業務は、季候・風土・水質などの違いの上に給水・排水の問題まで発生し、「作業容易ニ進捗セズ」であったが、何とか無事終わり、翌昭和一一（康徳三・一九三六）年二月一日に納入し終えたのであった。

このように池内は、精力的に満洲史関連事業を推進していったが、その中でも重要なものは、池内自身が実際に満洲国集安県所在の高句麗遺跡の踏査を行っていたことである<sup>8)</sup>。そこで、以下、それについて論究していくことにしよう。

## （二）池内宏の満洲国集安県所在高句麗遺跡踏査

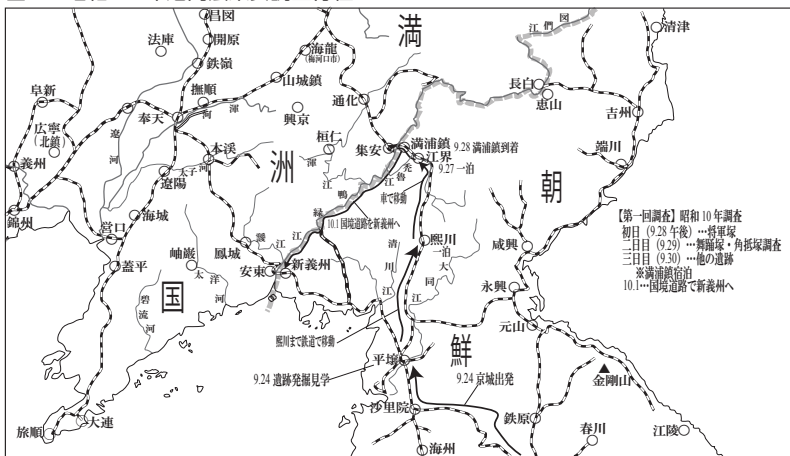
池内宏の高句麗遺跡踏査については、池内「一九三六〇・三六〇・一九三八」に詳細に記されているが、それによれば池内の高句麗遺跡踏査の契機は、満洲国安東省視学官であった伊藤伊八が昭和一〇（一九三五）年五月に、集安で二基の壁画古墳を発見し、多くの研究

者の耳目を集めたためであった。この新たな壁画古墳発見に対して、満洲国文教部では同年秋にこれら壁画の撮影を決定し、それにあわせて調査に赴く予定であった関野貞が、同年六月、東京帝大の池内を訪れ、その同行を求めたのであった。しかし、池内は「進んで行かうとは答えなかつた」という。それは池内が熱河地方の踏査から帰国してからそれほど時間も経っておらず、「たとひ秋のことではあるにしても、旅行を重ねることに何となく気が進まなかつたから」であった(池内「一九三六〇・三六〇」)。池内の熱河踏査についての具体的な実施状況などは必ずしも詳らかではないが、既述のように池内は昭和一〇(一九三五)年三月から熱河の避暑山荘の康熙帝の題詠の複製事業に着手しており、おそらくそれと関わって直接熱河を訪れていたのである<sup>9)</sup>。同年七月には池内と京都帝大の濱田耕作が関野の調査に同行すると報道されたが、池内はこの段階でも「余自身の遊志は未だ動いていなかった」のであった(池内「一九三六〇・三六〇」)。

ところが、事態は急展開する。それは同年七月二九日、関野が急逝したためである。池内はこの報告を軽井沢の寓居で接し、あわてて上京して関野の告別式に列し、「故博士の英霊を慰むべく」、集安の踏査に参加する意を決したのであった(池内「一九三六〇・三六〇」)。

こうして渡満を決意した池内は、同年九月二三日に京城において第二回朝鮮総督府宝物古蹟名勝天然記念物保存会委員会に、ともに調査に赴く濱田が参加するのを利用して集安調査を決定したのであった。池内たちは翌二四日に京城を出発し、途中、平壤で遺蹟発掘調査を見学した後、平壤で合流した京城帝大の藤田亮策、京都帝国大の梅原末

図7 昭和10年池内宏集安調査行程



治、朝鮮総督府嘱託の小場恒吉らとともに、熙川までは列車で北上して一泊した後、そこからは自動車に乗り江界へ向い、同地で一泊して、九月二八日、鴨緑江岸の満浦鎮に到着し、正午、鴨緑江を渡河して集安に入ったのであった(図七参照)。そして、同日、新たに壁画古墳を発見した伊藤伊八や写真撮影にやってきた座右宝刊行会の斉藤菊太郎も集安で合流し、二日半にわたる調査を行ったのであった。

「通溝地方には往往土匪が出没するので、調査は満洲国兵士の護衛の下に行はれた。殊にや、かけはなれた山城子の山城を調査する時には、我が駐屯軍の兵士をも煩はした。随つて一行の総てが皆な行動を共にするわけであ」ったという状況であった(池内「一九三六〇・三六〇」)。これは換言すれば、池内たちの調査が護衛の兵士に守られながらも行

われねばならなかったことを示唆している。そこまでして高句麗遺跡を調査しなければならなかったのは、「独立した歴史が存在しない」とされた満洲の歴史を明らかにし（「吉林省旧渤海国東京城趾調査事業助成」レファレンスコード B05015879600）、「満洲国ノ歴史的特殊性ヲ広く世界ニ宣揚スル」（「高句麗時代及遼時代東陵壁画出版事業助成 池内宏 自昭和十年 至昭和十四年」（分割一・二、レファレンスコード B05015892300・B05015892400））必要があったからであり、さらに「従来放置されてゐた歴史的遺物を満洲国の手に及んでから調査して貴重な資料を整理した学術的研究を深め、優秀な研究報告書を作り、著名な大学、研究所に配布して学界に貢献」することが、「満洲国不承認を主張して止まない諸外国の間にあつて満洲国の存在と文化を宣揚する最も力のあるもの」と考えられていたからでもあった（「満洲国文化協会紀要（レファレンスコード B05016057100）」）。ここから当該期の池内らの集安踏査が国際社会における満洲国承認の上でもきわめて重要であつたことをうかがい知れるとともに、ここにその研究の性格の一端が示されているといえよう。

一方、この池内らの調査については池内「一九三六・三六」以外に、アジア歴史資料センター所蔵「高句麗時代及遼時代東陵壁画出版事業助成 池内宏 自昭和十年 至昭和十四年」（分割一・二、レファレンスコード B05015892300・B05015892400）にも伝えられている（図八）。これによれば、既述のように文教部は集安の壁画古墳の撮影を決定したが、これに際して約三四〇〇円の補助を行つていたことがわかる。また、前述の斉藤菊太郎についても、彼が文教部の援助によって慶陵の

撮影に参加した後、九月に文教部の依頼を受けて集安に出張したこともうかがえる。

もつとも、斉藤とともに撮影に従事した座右宝刊行会の動向については、同文書所収「遼の東陵壁画撮影旅行日誌」に、慶陵の撮影を終

え、九月二二日（斉藤のみ翌二三日）、奉天に戻り、ただちに新京に赴いて満日文化協会に事業経過を報告し、一〇月五日まで奉天に滞在して、写真の現像、荷物の整理を行つていた、とあり、さらに康德二（一九三五）年一〇月六日、満日文化協会常任理事・榮厚が岡田文化事業部長殿に送つた「陵壁画写真撮影二関スル件」には、「…（前略）：更二本日（一〇月五日…井上）文教部ノ援助ヲ得テ安東省集安県ニ於ケル高句麗時代壁画撮影ノタメ出發セルヲ以テ東京帰着ハ本月末ト相成ルヘク…（後略）…」とあるから、おそらく座右宝刊行会の写真班のうち斉藤のみが、池内の集安調査に合わせてまず集安に駆け付け、残りの二名は一〇月五日、壁画古墳の撮影のために集安に赴いたのである。

こうして一行は、集安の国内城や伊藤伊八が新たに発見し、池内らによつて「角抵塚」「舞踊塚」と名付けられた古墳などを調査したのであるが、その時、伊藤はさらに羊魚頭墓区のなかに墨書の存する古墳（牟頭婁塚）の存在することを聞き、池内たちを案内している（図

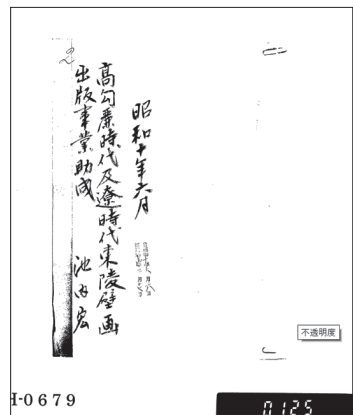


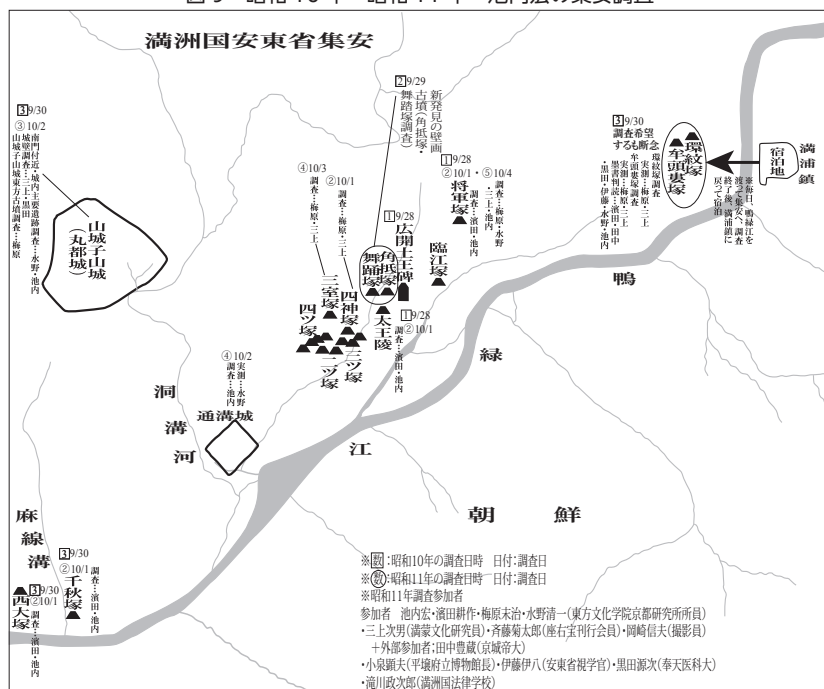
図 8

九)。残念ながら、池内たちは墓室が閉塞されていたため、墓室内部への立ち入りを断念したが、帰国後、池内は座右宝刊行会の斉藤から墓室内部の墨書銘の存在を知らされ、「写真を見ず、全文を通覧せず、たゞ書面の上のこれだけの報告(十二三行よく読めるといふのについても、たゞさう報ぜられただけである)に本づいてかろがるしく立言するのは慎しまねばならぬが」と前置きしながらも、「広開土王碑についての貴重な史料として大いに学界を喜ばせることであろう」と論じ、その重要性を指摘したのであった(池内「一九三六・三六」)。

その後、池内は斉藤の帰京後、「齋らし来つた完全なる写真」を見ずることになり、「判読に堪へる部分は案外少なく、此の珍史料のからたやすく新しい史実を描き出したいことを知って、頗る失望せざるを得なかつた」とも「補記」で述べ(池内「一九三五」)、落胆の思いを吐露している。

その後、池内らが帰国した後、集安に残留し調査を続けた伊藤によつて、牟頭婁塚の近くから新たな壁画墳(環文塚)が発見され、さらに同年一〇月には文教部から派遣された金毓黻も五盔墳の北方に四神塚を発見するなど、貴重な成果を挙げており(池内「一九三八」)、池内が新たに発見された壁画古墳を含め、それら古墳の重要性を十分に認識していたのは間違いない。そうであったからこそ、池内は翌昭和一一(一九三六)年五月二日に、これら高句麗壁画の出版補助願いを外務省文化事業部に提出し(「高句麗時代及遼時代東陵壁画出版事業助成 池内宏 自昭和十年至昭和十四年」前掲)、さらにこれら新発見の壁画古墳の精査要請に応じ、翌昭和一一(一九三六)年九月三〇

図9 昭和10年・昭和11年 池内宏の集安調査



※図・昭和10年の調査日時 日付:調査日  
 ※◎昭和11年の調査日時 日付:調査日  
 ※昭和11年調査参加者  
 参加者 池内宏・濱田耕作・梅原末治・水野清一(東方文化学院京都研究所員)  
 ・三上次男(滿蒙文化研究員)・斉藤菊太郎(座右宝刊行会員)・岡崎信夫(撮影員)  
 ・外部参加者:田中豊蔵(京城帝大)  
 ・小泉頭夫(平壤府立博物館長)・伊藤伊八(安東省視学官)・黒田源次(奉天医科大)  
 ・滝川政次郎(滿洲国法律学校)

(池内宏「滿洲国安東省輯安縣高句麗遺跡」満日文化協会、1936年をもとに一部追加・訂正)

日一〇月四日にかけて、再度、京城帝大の濱田耕作・梅原末治、京城帝大の田中豊蔵、平壤府立博物館の小泉頭夫などとともに集安の踏査をおこなったのであった(池内「一九三八」)。そして、その成果が池内宏・梅原末治『通溝』上・下巻(日滿文化協会、一九三八・

一九四〇年)として結実することになったのであった。

この『通溝』の具体的な内容・その意義などについては、すでに斯界の認知するところであるが、実は同書出版に関する詳細な記録が、前掲のアジア歴史資料センター所蔵「高句麗時代及遼時代東陵壁画出版事業助成 池内宏 自昭和十年 至昭和十四年」として残されている(以下、特にことわりがない限り、同文書からの引用とし、出典は省略する)。そこで、ここではこの文書からうかがえる『通溝』作成に関する諸事情を明らかにし、あわせて池内の研究を理解する上での端緒にしたいとおもう。

### (三) 池内宏の『通溝』出版事業

同文書によると、『通溝』の刊行は新発見の集安高句麗闕壁画関連出版事業だけでなく、「興安西省「ワリー・マンハ」ニ於ケル遼時代東陵壁画出版事業」とあわせて申請されたもので、それは前者が「東方学術上稀レナル発見」で、後者が「遼時代(約九百年前)ノ文化ヲ知り得ベキ唯一ノ史料トシテ世界著名ナル遺蹟」であり(池内宏「満洲国安東省集安県ニ於ケル高句麗時代壁画及興安西省「ワリーマンハ」ニ於ケル遼時代東陵壁画出版費用補助願」、これら高句麗・遼陵壁画(慶陵のこと・筆者、以下、慶陵)は「之ヲ日本ニ於テハ法隆寺ニ支那大陸ニ於テハ西域高昌ノ遺跡等ニ仏教芸術ノ遺物トシテ見ラルルノミニシテ洵ニ重要ナル史料」であり(「安東省集安県高句麗時代古墳壁画及興安西省「ワリーマンハ」遼陵壁画出版ニ関スル件」)、「満洲ノ文化歴史上重要ナル資料ニテ歴史的材料ニ乏シキ高句麗民族及遼

民族ノ歴史文化ヲ闡明スル唯一ノモノ」で、「東方文化ノ基因ト其民族生活ノ歴史探究ノ便ニ資」し、「又満洲国ノ歴史的特殊性ヲ広ク世界ニ宣揚スル」ものでもあったからである(日滿文化協会・榮厚「遼の皇陵及高句麗墳墓の壁画出版助成」)。

そうであったからこそ、この出版申請に關してわざわざ在満洲国特命全權大使であった南次郎から外務大臣・広田弘毅に対して「助成方御詮議相成度此段申進ス」と進言されたのであった(昭和二年二月二五日「遼ノ皇陵及高句麗墳墓ノ壁画出版助成方ノ件」。これは南だけでなく、在満洲国特命全權大使であった植田謙吉からも行われており(昭和一年六月一日「遼皇陵及高句麗古墳壁画出版助成方ノ件」)、学者だけでなく、政治家・軍人でもあった元朝鮮総督の南や元関東軍司令官であった植田が、わざわざその出版の重要性を指摘したのは、それが満洲国の歴史的基盤とも密接に關わっていたからであろう。ここに池内らの研究・出版作業の政治性が認められよう。

こうしたことを受けて、池内が昭和一一(一九三六)年五月二日に申請した「満洲国安東省集安県ニ於ケル高句麗時代壁画及興安西省「ワリーマンハ」ニ於ケル遼時代東陵壁画出版費用補助願」は、「政界学術上重要ナル資料ヲ提供スルモノニシテ学界其他ノ益スル処尠カラス文化事業トシテ有意義ナリト認」められ、昭和一年から三年間、一年につき一〇〇〇〇円、合計三〇〇〇〇円が出版助成されることになり、昭和一年五月一四日、昭和一一年度の補助金として金一〇〇〇〇円が交付されたのであった(指令書第四九号)。

池内の計画では、三年計画の一年目の昭和一一(一九三六)年に「原

色版写真ノ製版」、「高句麗壁画ニ関スル編纂及解説、翻訳（漢訳及英訳）」を完成させ、二年目（昭和一二（一九三七）年）に一年目に編纂・翻訳した解説を印刷に回して製本し、各方面に配布し、三年目（昭和一二（一九三八）年）には前年度より作業を行っていた慶陵に関する原稿・写真などを印刷・製本し、各関係方面に配布し、事業を完成させることとなっていた。

しかし、事業は必ずしも池内の計画した通りに進まなかったのである。その理由の第一が経費の削減であった。池内は当初、第一年目から第三年目までの予算を一年ごとに一〇〇〇〇円とし、既述のように外務省文化事業部もそれを認め、補助申請に口添えを行った植田謙吉在満洲国特命全權大使に対しても有田外務大臣の名で、昭和一年五月三日日付で昭和一年度から昭和一三年度まで年ごとに一〇〇〇〇円、合計三〇〇〇〇円を助成することが決定した旨を通知していたのであった（昭和一年六月一日「遼ノ皇陵及高句麗墳墓壁画出版方助成ニ関スル件」）。これをふまえて、池内も昭和一二年七月に昭和一二年年度補助願を提出し、外務省文化事業部も指令第七八号（七月一〇日）で一〇〇〇〇円を三回に分けて交付することを伝えている。

ところが、昭和一二年度の事業経過報告（昭和一三年九月二五日）によれば、昭和一二年度に池内が受領したのは、当初予定されていた一〇〇〇〇〇円のうち、六五〇〇〇円だけであったのである。池内は当初の計画通り、「昭和一二年度七月上旬起稿同年十月七日ニ擱筆」し、ただちに組版に回し、さらに漢文・英訳作業も完了して、上巻に使用する用紙も購入し、印刷に回す予定であったが、昭和一二年度では「之

ヲ行ハズ、昭和十三年度ニ於テ是ヲ完了セシムル事トセリ」と決断したのであった。上述のように交付された予算が予定の約三分二程度ほどであったからである。

この経費削減は二年度だけでなく、当初の予定の最終年度でもある第三年目の昭和一三年度も同様であった。池内は昭和一三年度の予算申請に際して、特に外務大臣指令によって金一〇〇〇〇〇円の助成が許されたにもかかわらず、六五〇〇〇円しか受領していないこと訴え、残金三五〇〇〇円を昭和一三年度の予算請求に加算して請求したのであった（昭和一三年四月二七日）。しかし、これに対して外務省文化事業部では「本年度ハ時局ニ関連シ諸経費節約ノ必要ニ迫ラレ居旁々**国策ニ関係ナキ純学問的ノ研究助成ハ中止又ハ繰延ブルコトナリタルニ、就テハ本件事業モ一部繰延フルコト**」（遼代壁画出版助成ニ関スル件）昭和一三年七月六日、ゴチ・筆者」と回答し、七月一六日には「**今般ノ時局ニ鑑ミ昭和十三年度ニ於テハ極力経費ヲ節減スルコトニ相成本件事業ニ対シテモ減額助成ノ余儀ナキニ至リ**」、昭和一三年度は六五〇〇〇円のみ助成することが池内に伝えられた（遼時代東陵壁画出版事業助成ニ関スル件）。

前年の昭和一二（一九三七）年七月に起こった盧溝橋事件を契機として、日本と中国との対立は華北・上海方面などにも拡大して全面戦争へと発展し、出版事業三年目の昭和一三年五月には国家総動員法が施行されていたのであった。外務省文化事業部がいう「時局」とはこうした事態を指すのであろう<sup>100</sup>。こうしたなか、池内の高句麗壁画墳・慶陵刊行事業は「**国策ニ関係ナキ純学問的研究**」とみなされ、経費の



削減を余儀なくされてしまったのであった。さすがに外務省文化事業部もこれでは刊行事業は困難と考えたようであり、「経費不足ニヨル事業未完成ノ分ハ次年度ニ繰越サシムルコトト致度シ」と池内に通知している（「遼代壁画出版助成ニ関スル件」昭和一三（一九三八）年七月六日）。満洲国の存立基盤ともなる満洲史の重要な一部であり、「又満洲国ノ歴史的特殊性ヲ広く世界ニ宣揚スル」ための事業は、日中戦争、それに対処するための国家総動員法の施行という拳国一致体制の前では、「国策ニ関係ナキ純学問的ノ研究」と考えられ、予算削減の憂き目に遭ってしまったのであった。

こうした苦しい財政状況のもとで、昭和一三年度に『通溝』上巻はなんとか刊行され、関係者に配布されたのであった。池内は「昭和一三年度事業経過報告（昭和一四年六月）」のなかで、同書を昭和一三年一〇月一〇日に天皇・皇后及び秩父宮・高松宮に奉獻したこと、内地及び欧米諸国の大学・図書館に寄贈し、「所期ノ如ク満洲ノ古文化ヲ広く内外ニ宣揚スルヲ得」、かつそれら海外の大学から「懇切ナル謝状」が送られ、「本書ノ体裁ノ華麗ナルト、ソノ内容ノ学術的価値ノ大ナルトヲ称揚」されたこと、「文化的交歓ニ資」していたことを特筆し、「本書頒布ノ効果ノ甚大ナルヲ証スルモノタリ」であったことを外務省文化事業部に強調した。

さらに、池内は「昭和一四年度補助願」でも、「欧米ノ諸国ヲシテ非常時下ニ於ケル我が大陸古文化研究ノ隆盛並ビニ印刷技術ノ優秀ナル事ヲ確認セシメシモノニシテ本書出版ノ効果ノ甚大ナルヲ証シテ余リアリ」と述べ、同書の刊行が欧米諸国からも認められ、「非常時

下ニ於」ても極めて重要であったことを高唱したのであった。こうした池内の主張は日中戦争にともなう国家総動員体制下の時局の逼迫するなかにおいて、出版計画が「国策ニ関係ナキ純学問的研究」とされたことへの池内なりの反論と理解してよいであろう。このように経費の削減などをふまえつつ、なんとか苦勞して『通溝』上巻は刊行されたが、この出版事業の困難はそれだけではなかった。

それは『通溝』下巻を担当していた濱田耕作の逝去である。同事業が池内の計画通りに必ずしも進展しなかつた理由の第二がここにある。『通溝』下巻は、「現地方ニ於ケル新発見ノ古墳壁画ノ解説ヲ目的トシテ、理事濱田耕作等之ニ当」り、作業を進めていたのであった。ところが、事業三年目の昭和一三（一九三八）年七月、濱田が突然死去してしまったのである。その結果、池内が濱田に代わって、下巻も担当することになり、京都帝大の梅原末治と協力して報告書の起草を急ぎ行わねばならなくなってしまったのであった<sup>10</sup>。実は、濱田は薨去直前まで京都帝大総長の要職にあって、『通溝』と同時並行で行われていた慶陵の調査は、濱田が「長期出張不可能ナルヲ以テ」、濱田に代わって京都帝大講師の田村實造が行っていたのであった。上巻に比べ下巻の編纂作業が遅れていたのは、濱田が京都帝大総長として多忙であったことも無関係ではなからう。そうしたなかで突然の濱田の死亡により、池内が急遽、下巻の執筆・編纂作業まで行わなければならなくなってしまったのであった。

助成金の削減、さらに濱田の急逝などもあって、事業は池内が当初予定していた三年で終わらず、当該作業は四年目の昭和一四

(二九三九)年に突入していったのであった。池内は昭和一四年度の「補助願」に一二月中には『通溝』下巻も印刷を終える予定である旨を特記し、昭和一四年度の経費として『通溝』下巻助成三二六一円、慶陵壁画出版助成一〇五〇〇円、計一三七七一円の助成を「特ニ御願申上」げたのであった。

これに対して外務省文化事業部は、『通溝』下巻のみ、池内の申請通り三二六一円の助成を認めたものの、慶陵壁画出版助成については減額し、六二六一円のみ補助を通知している(昭和一五年一月二〇日)。いずれも満洲史上重要な資料とされながら、『通溝』下巻刊行のみが申請額通り助成されたのは、すでに上巻が発刊され、池内が強調したように、『通溝』上巻が欧米各国から大いに称賛されたことをふまえてのことであろう。世界からの孤立化を深める当該期の日本にとって、欧米からの高評価は極めて重要であったに相違ない。『通溝』刊行事業は外務省文化事業部にとって「国策ニ関係ナキ純学問的研究」と考えられていたのであるが、池内の指摘などにより、外務省文化事業部もまたその重要性に気づいたのである。換言すれば、池内は『通溝』の刊行が国策上極めて重要であることを強調することによって、助成金を得たのであった。池内のそれは『通溝』刊行のためでもあったが、このことは『通溝』の刊行、さらには池内の研究が当該期の政治的情況と決して無関係ではなかったことを端的に示しているよう。だが、一年延長しても『通溝』下巻の刊行は、必ずしも池内が予定していた通りに進まなかった。その理由は日中戦争という挙国一致の戦時体制のためでもあった。これを『通溝』の刊行が遅れた理由の第

三として指摘できよう。池内の提出した「昭和一四年度事業経過報告」(昭和一五年五月二二日)によれば、当初の計画では昭和一四年度内に『通溝』下巻を刊行する予定であったが、「時局ノ影響ニヨリテ印刷ノ進行ニ尠カラザル支障ヲ来シ種々ノ困難ニ逢着セルガタメ」、予定の期限内に発刊することができなかったのであった。池内は外務省文化事業部に提出した事業報告書のなかで、紙価の相場の高騰をふまえ、事前に印刷用紙の購入を行ったことを伝えているが(「昭和一四年度事業経過報告」)、これなども戦時体制下での物資の不足と無関係ではなかったであろう。『通溝』は日中戦争という日本をめぐる厳しい環境の中で、種々の制約を受けながら編纂・出版事業が進められていったのである。<sup>82)</sup>

こうして『通溝』下巻、さらに慶陵調査報告書の編纂完了を目指して、五年目の昭和一五年度の出版助成申請が池内から提出され、それが許可されることになり(指令第九五号、昭和一五年一〇月一九日)、それを受けて『通溝』下巻は所期の予定から遅れること二年、昭和一五(一九四〇)年一〇月によく刊行されたのであった。<sup>83)</sup>

## 結語

以上、これまでほとんど注目されてこなかった『後藤新平文書』やアジア歴史資料センター所蔵の池内宏関係文書にもとづいて、池内の満洲史・満鮮史研究の一端を明らかにしてきた。池内は満鉄の歴史調査部で満鮮史上の一大歴史的事件ともいえる文禄慶長の役の研究に従事することになったが、白鳥庫吉を中心とする満鉄歴史調査部での

調査は、満鉄から利益を追求する鉄道会社に不必要とされ、池内は研究の転換を余儀なくされたのであった。また、満洲国建国を契機として外務省の支援のもと高句麗遺跡の調査を進めたが、その後、調査報告書の刊行の段階で、外務省文化事業部から時局に関係のない純学問的研究とされ、経費を削減されることになってしまったのであった。このように池内の研究は、満鉄や外務省から緊急性を要しないものと評価されてしまうこともあった。しかし、看過できないのは、そうであったものの、それら研究が満鉄や外務省文化事業部の支援を受けていたこともあって、その政治性を免れなかったことである。

池内の所属した満鉄歴史調査部での満洲史研究は、その創設者である白鳥が後藤に対して、日露戦争以後の日本の満洲経営と関連させて、「学者の閑事業にあらずして、国家経営の任に当る為政者の任なり、国民の任なり」と直言していたし（『満洲歴史編纂の急務』後藤新平文書三三八・三四）、池内も満洲史研究を満洲国の正統性・存立基盤と一貫して関連付け、それら研究が「時局」と密接に関係することを高唱することによって、研究助成金を得、研究を続けてきたのであった。ここに積極的に満鮮史研究をリードしてきた池内の当該期の研究の特徴の一つが認められるといえよう。そして、その弟子であった三上次男や旗田巍もまたそれら研究に従事していったのであって、その研究は白鳥・池内にとどまるものではなかったのである<sup>14)</sup>。

一方、こうした研究は、井上「二〇一八」が指摘したように、京都帝大でも行われていたのであって、それら研究も戦前日本の研究の実態やその批判的再検討を行う上で決して軽視できない。それゆえ向

後もこうした研究の目的・実態などを一つ一つ詳細に解明していくことが必要であるが、それについては今後の課題としてひとまず擱筆することにした。

#### 註

- (1) 満鮮史という概念、歴史地理的空間は、現在使用されておらず、本来は「満鮮史」と表記すべきであろうが、煩雑なため、このように表記する。以下、同様。
- (2) 白鳥庫吉の後藤新平への建議、歴史調査部の設立の経緯については、井上「二〇一三」を参照されたい。
- (3) 池内「一九〇八・〇九」は、池内「〇八」<sup>a</sup>と異なり、作者名が梧影に、翌年刊行の池内「一九一〇<sup>a</sup>・一〇<sup>b</sup>」では作者名が池内梧影になっており、その翌年の池内「一九一一」以後は作者名が池内宏となっている。池内「一九〇八・〇九」がインド関係の論文であったため、意図的に作者名を梧影としたのかは判然とせず、そこに池内が込めた何らかの意図があった可能性も否定しえないが、それについては保留し、今後の課題としたい。なお、池内が在学中に発表した池内「一九〇四」<sup>c</sup>では作者名が「Y」<sup>c</sup>となっており、そこにも何らかの意図があったようであるが、これについても不明である。
- (4) 歴史調査部の当初の部員が白鳥庫吉以外に箭内互・松井等・稲葉岩吉だけであったことは、史学会「一九〇八・〇九」からもうかがえる。

- (5) 稲葉の金沢訪問については、稲葉「一九〇九・〇九」に言及されているが、それには漢籍の紹介が若干なされているのみで、調査の経緯や結果などについては断片的にわずかに言及されているにすぎない。そのため、歴史調査部や後藤に提出したのであろう「金沢訪問劄記」がこれと完全に一致するわけではなさそうである。稲葉「一九〇九」によれば、稲葉の金沢調査は内藤湖南の誘いを受けてのもので、内藤湖南・富岡桃華（謙蔵）とともに明治四一（一九〇八）年一月に実施されたという。ちなみに、稲葉「一九〇九」には大阪朝日新聞の瀬尾君から便宜を得たとも記しているから、彼もまた稲葉たちの調査に同行したのであろう。なお、稲葉の金沢踏査についての論文が寺内「二〇〇四」所載「稲葉岩吉著作目録」に認められることを鈴木開（明治大学）から指摘いただいた。ここに記して謝意を示しておきたい。ただし、寺内「二〇〇四」所載の前掲目録には稲葉「一九〇九」のみが認められ、「一九〇九」は採録されていない。
- (6) 稲葉・松井・箭内の満洲踏査については井上「二〇一七」を参照。この踏査時に同じく歴史調査部に所属していた池内・津田は参加していない。おそらく、池内・津田の加入前に計画されていたため、予算的な問題があったのであろう。なお、朝鮮関係史料の蒐集・調査していた池内はその後もしばらく渡鮮せず、池内がはじめて朝鮮へ調査に赴いたのは、大正七（一九一八）年九月一三日のことであった（東京朝日新聞大正七年一〇月二〇日記事）。
- (7) 青山公亮他・旗田魏他「二〇〇一」のなかで三上次男は、この池内「一九〇四」が池内の卒業論文と思われると発言している。そうだとすれば当時、東京帝国大史学科教授であった白鳥は、はやくから池内が日明関係史に関心をもっていたことを知っていたはずで、そうしたこともあって、池内に文禄慶長の役の研究を担当させたのではないかとおもわれる。
- (8) 池内は昭和八年に実施された東亜考古学会の渤海東京城の調査にも参加しているが、これについてはすでに酒寄「二〇〇七」に詳述されており、そちらを参照されたい。
- (9) 「避暑山荘題詠複製事業助成（池内宏）昭和十年三月」（レファレンスコード B05015882100）にみえる池内が外務省文化事業部に提出した「避暑山荘題詠複製事業収支計算書」には、旅費がみえないため、あるいは熱河への踏査はこれとは別の資金を利用したのかもしれない。
- (10) 池内らが予算を削減された前年の昭和十一年、東亜考古学会は、ずさんな会計監査を外務省文化事業部から指摘され、組織の改編を余儀なくされているが（「東亜考古学会ニ対スル助成金監査 東亜考古学会 昭和十一年四月」（レファレンスコード B05015883600）、酒寄「二〇〇七」は、こうした処置が東亜考古学会のずさんな会計処理だけでなく、同年五月に行われた外務省機構改革とも関わっており、その結果、東亜考古学会に対する厳しい監査、改革要求が行われたと推定する。池内らの事業に対しては、特に外務省文化事業部からのこのような批判・指摘はなく、また外務省文化事業部も当初の予定通り一百万円の支出を支持

しているから（指令書（指令第七八、昭和十二年七月一〇日）、池内らの事業費削減をこのような東亜考古学会への予算削減、外務省の機構改編と関連づけて理解できないであろう。むしろ、注目すべきなのは、これら事業費が義和団事件賠償金等を歳入財源とする対支文化事業特別会計から支出されていたが、昭和一二年度以後は賠償金収入が得られなくなり、急激に歳入が減り、昭和一六年度には廃止となっていることである（外務省百年史編纂委員会「一九六九」）。したがって、池内らの事業に対する経費削減は、昭和一二年度七月七日に勃発した盧溝橋事件後の日中両軍の対立の一時沈静化を経て交戦が激化することになった（川田「二〇一四」、七月二五日以後の日中戦争拡大という「時局」と関連して削減されたと理解してよからう。

(11) 羽田亨の昭和二三（一九三三）七月一八日の日記には「池内君東京より来る集安の出版物につきて梅原氏と相談旁々浜田君を見舞へるなり」とあって（羽田亨・京都大学大学文書館「二〇一九」、池内は濱田薨去前にすでに「集安の出版物」（『刊行準備中の『通溝』）について梅原と相談しており、濱田病死という事態にあらかじめ備えていたようである。なお、羽田亨・京都大学大学文書館「二〇一九」については、渡辺健哉（大阪市立大学）よりご教示を得た。ここに記して謝意を示しておきたい。

(12) 青山・旗田他「二〇〇一」によれば、池内は『通溝』刊行に際して天金と背文字のために金粉を購入していたようだが、戦争が激しくなり金粉の使用が禁止されたため、結局、「三部だけ天金

のを作って編輯したものの労に報いよう」ということになり、池内・座右寶刊行会の斉藤、池内の弟子であった三上次男がそれらを所有することになったという。なお、本論で指摘したように『通溝』刊行までにはさまざまな問題が発生していたが、青山公亮他・旗田魏他「二〇〇一」所収の池内一の回想によれば、池内は『通溝』の刊行に際して「本当になめるようにしてやってい」て、楽しんでもいたようであったという。

(13) この時、『通溝』とともに出版助成を受けていた慶陵関係報告書は結局、同年には刊行されず、その後、田村實造らの調査を経て編纂作業が続けられたが、測量図が対ソ戦の軍事機密にあたとされ、第二次大戦中は発表を禁じられた。さらに出版に向けての図版や写真原板は東京の座右寶刊行会に預けられていたが、空襲によって大半が焼失し、加えて一九四五年に第二次世界大戦の終了によって日滿文化協会も解散することになり、報告書の刊行は絶望視されたのであった。その後、文部省の助成によって一九五四年になってようやく、田村實造・小林行雄『慶陵・東モングリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に関する考古学的調査報告慶陵・東モングリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に関する考古学的調査報告』（座右寶刊行会、一九五二・一九五三年）として刊行された。なお、こうした経緯や戦前日本の契丹調査については、古松崇「二〇〇五」が詳細に論じており、参照されたい。

(14) 当該期の三上次男や旗田魏の研究については、井上「二〇一八」を参照のこと。

参考文献

- 青山公亮他・旗田巍他「二〇〇一」「先学を語る―池内宏博士―」
- 東方学会編『東方学回想Ⅱ 先学を語る(二)』刀水書房
- 池内宏、一九〇四<sup>a</sup>、「明初に於ける支那と日本との交渉」『歴史地理』六・五・六・七・八
- 池内宏、一九〇四<sup>a</sup>、「欧羅巴人に紹介せられたる最初の日本」『歴史地理』六・七
- 池内宏、一九〇七、「欧羅巴人渡来以前の西方記録に見えたる日本国(前)」『東洋時報』一一一
- 池内宏、一九〇八<sup>a</sup>、「欧羅巴人渡来以前の西方記録に見えたる日本国(下)」『東洋時報』一一二
- 池内宏、一九〇八<sup>a</sup>、「ネストリ派の支那布教」『東洋時報』一一六・一一七・一一八
- 池内宏、一九〇八<sup>a</sup>、「古代のカノージ市とその支配者に就いて」『東洋時報』一一二
- 池内宏、一九〇九、「スラーヴァスチの位置に就て」『東洋時報』一二四・一二五
- 池内宏、一九一〇<sup>a</sup>、「文祿征韓の役に於ける清正の民政と端川の銀山」『東洋時報』一四一
- 池内宏、一九一〇<sup>a</sup>、「龍仁の戦い」『東洋時報』一四五
- 池内宏、一九一一、「カトカイといふ地名に就きて」『東洋時報』一一三
- 池内宏、一九一二、「カライサンといふ地名に就いて」『東洋時報』一二一
- 池内宏、一九一三<sup>a</sup>、「梁大司馬実記所収従軍日記の偽作を辨ず」『東洋学報』三・一二
- 池内宏、一九一三<sup>a</sup>、「海汀倉の戦いにつきての考」『史学雑誌』二四・一五
- 池内宏、一九一三<sup>a</sup>、「文祿戦役開始以前に於ける秀吉の対外的態度を論じて此の戦役の発端に及ぶ」『史学雑誌』二四・七・九・一〇・一一・一二
- 池内宏、一九一四<sup>a</sup>、「文祿戦役開始以前に於ける秀吉の対外的態度を論じて此の戦役の発端に及ぶ」『史学雑誌』二五・一・二
- 池内宏、一九一四<sup>a</sup>、「京城の軍議に関する黒田家譜の記事の錯簡と軍議の時日」『史学雑誌』二五・三
- 池内宏、一九一四<sup>a</sup>、「海汀倉の戦いについて再び河合学士に答ふ」『史学雑誌』二五・四
- 池内宏、一九一四<sup>a</sup>、南満洲鉄道株式会社歴史調査報告第三『文祿慶長の役正篇第一』丸善
- 池内宏、一九一五、「加藤清正のオランカイ攻伐」『史学雑誌』二六・一五
- 池内宏、一九三六<sup>a</sup>、「文祿慶長の役別篇第一」丸善
- 池内宏、一九三六<sup>a</sup>、「通溝二日半 満洲国安東省輯安県に於ける高句麗の遺跡」『東洋』三八・一二
- 池内宏、一九三六<sup>a</sup>、「満洲国安東省輯安縣高句麗遺蹟」満日文化協会
- 池内宏、一九三八、「通溝 満洲国通化省輯安県高句麗遺蹟」上巻、日滿文化協会

池内宏・梅原末治、一九四〇、『通溝 滿洲国通化省輯安県高句麗  
壁画古墳』下巻、日滿文化協会

池内博士関連記念東洋史論叢刊行会、一九四〇、「池内博士著作年表」

『池内博士還暦記念東洋史論叢』座右宝刊行会

※池内の業績については、池内博士関連記念東洋史論叢刊行会

「二九〇四」の「池内博士著作年表」を参照。

井上直樹、二〇一〇、「戦後日本の朝鮮古代史研究と末松保和・旗

田巍」『朝鮮史研究会論文集』四八

井上直樹、二〇一三、『帝国日本と〈滿鮮史〉』塙書房、二〇一三年

井上直樹、二〇一七、「白鳥庫吉の滿洲調査―国立公文書館アジア

歴史資料所蔵文書の分析を中心に―」『日本中国考古学』一七号、

二〇一七年

井上直樹、二〇一八、「滿洲国と滿洲史研究―アジア歴史資料セン

ター所蔵文書の分析を中心に―」『京都府立大学学術報告 人文

篇』七〇

稲葉君山、一九〇九<sup>ア</sup>、「金沢訪書談」『日本及日本人』五〇一

稲葉君山、一九〇九<sup>イ</sup>、「金沢訪書談」『日本及日本人』五一二

荊木美行、二〇一四「通溝」上巻の池内宏自筆原稿」『金石文と古

代史料の研究』燃焼社

岡村敬二、二〇〇六、『日滿文化協会の歴史―草創期を中心に―』

外務省百年史編纂委員会、一九六九、『外務省の百年』下巻、原書房

川田稔、二〇一四、『昭和陸軍全史 二 日中戦争』講談社

京都大学文学部、一九五六、『京都大学文学部五十年史』京都大学

文学部

京都木曜クラブ、二〇〇一、『考古学史研究』九

窪徳忠、一九九四、「池内宏」江上波夫編『東洋学の系譜』大修館

書店

五井直弘、一九七六、『近代日本と東洋史学』青木書店

酒寄雅志、二〇〇一、「渤海史研究と近代日本」『渤海と古代の日本』

校倉書房

酒寄雅志、二〇〇七、「東亜考古学会の東京城調査」『東亜考古学会

と近代日本の東アジア史研究』（平成一六年度〜平成一八年度科

学研究費補助金（基盤研究（〇）研究成果報告書）

史学会、一九〇八、「極東研究の新機運」『史学雑誌』一九一四

史学会、一九〇九、「戊申史壇総覧」『史学雑誌』二〇一

白鳥庫吉、一九一四、「池内宏著『文禄慶長の役』序」南滿洲鉄道

株式会社歴史調査報告第三『文禄慶長の役正篇第一』丸善

白鳥庫吉、一九二八、「学習院に於ける史学科の沿革」『学習院輔仁

会雑誌』一三四

白鳥庫吉、一九七一<sup>ア</sup>、「後藤伯の学問上の功績」『白鳥庫吉全集』

一〇、岩波書店、「初出」『吾等の知れる後藤新平伯』東洋協会、

一九二九年

白鳥庫吉、一九七二<sup>イ</sup>、「滿鮮史研究の三十年」『白鳥庫吉全集』

一〇、岩波書店、「初出」

『国本』一四、一九三四年

塚瀬進、二〇一一、「戦前、戦後におけるマンチュリア史研究の成

果と問題点』『長野大学紀要』三三二巻三号

津田左右吉、一九六五、「日記二」『津田左右吉全集』二二六、岩波書店

寺内威太郎、二〇〇四、「満鮮史」研究と稲葉岩吉』寺内威太郎他

『植民地主義と歴史学』刀水書房

東京朝日新聞、一九一八、大正七年一〇月二〇日記事「学会消息」

徳島県立鳥居龍蔵記念館、二〇一三・二〇一五・二〇一七、『徳島県

立鳥居龍蔵記念館研究報告』一・二・三

中見立夫、一九九二、「日本の東洋史黎明期における史料への探究」

神田信夫先生古稀記念論集編纂委員会編『神田信夫先生古稀記念

論集 清朝と東アジア』山川出版社

中見立夫、二〇〇六、「日本的「東洋学」の形成と構図」(『岩波講

座「帝国」日本の学知 第三巻 東洋学の磁場』

旗田巍、一九六六、「日本における東洋史学の伝統」幼方直吉・遠

山茂樹・田中正俊編『歴史像構成の課題 歴史学の方法とアジア』

御茶の水書房、「初出」『歴史学研究』二七〇

羽田亨・京都大学大学文書館、二〇一九、『羽田亨日記』京都大学

大学文書館

古松崇志、二〇〇五、「東モンゴリア遼代契丹遺跡調査の歴史」

一九四五年満洲国解体まで』『遼文化・慶陵一体調査報告』京

都大学大学院文学研究科

三上次男、一九七〇、「池内宏—その人と学問」池内宏『日本上代

史の一研究…日鮮の交渉と日本書紀』中央公論美術出版

和田清、一九三二、「満洲蒙古史」『歴史教育 臨時増刊号 明治以

後に於ける歴史学の発達』七一九

『後藤新平文書』

「満洲歴史編纂の急務」『後藤新平文書』P三八―三四―一

「明治四十一年満洲歴史調査報告書」『後藤新平文書』P三八―三四―二

「満鮮歴史地理研究事業継続願控」『後藤新平関係文書』P三八―

三四―四

「白鳥庫吉博士談話」『後藤新平関係文書』P三八―三四―四

国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵資料

「日満文化協会成立の件」レファレンスコード C04011714900

「対満文化事業」レファレンスコード B13081271200

「対満文化事業日満当事者懇談会ニ関スル件 昭和七年一月」レ

ファレンスコード B05015212100

「避暑山荘題詠複製事業助成(池内宏) 昭和十年三月」レファレン

スコード B05015882100

「清朝実録出版(池内宏) 昭和九年九月」レファレンスコード

B05015881900

「満日文化協会紀要」レファレンスコード B05016057100

「満洲国文化協会紀要」レファレンスコード B05016057100

「高句麗時代及遼時代東陵壁画出版事業助成 池内宏 自昭和十年至

昭和十四年」(分割一・二)、レファレンスコード B05015892300・

B05015892400

「東亜考古学会ニ対スル助成金監査 東亜考古学会 昭和十一年四

月」(レファレンスコード B05015893600)



(二〇一九年八月二十日受理)  
いのおえ  
なおき  
文学部歴史学科准教授